朗読劇
「線量計が鳴る」
元・原発技術者のモノローグ

脚本・主演　中村敦夫

原発の町で生まれ育ち、原発で働き、
そして原発事故ですべてを失った。
これは天命なのか。それとも陰謀か？
老人は謎解きの旅に出る。

8月11日（金）13時30分開演　13時開場

八戸市公民館
（八戸市内丸１丁目1-1　☎0178-45-1511）

■全席自由
■前売券2000円　（当日券2300円）
（高校生以下は無料）

同日・映画「日本と原発 ４年後」を上映

2017年
8月11日（金）午前10時上映
9時30分開場

八戸市公民館　■入場無料

予約・問い合わせ
◇電話・ファックス　0178-47-2321
◇メール1man-genkoku@mwe.biglobe.ne.jp

主催　核燃サイクル阻止１万人訴訟原告団
青森県八戸市根城9-19-9　浅石法律事務所内

共催　PEACE LAND /　ネットワークみどり

朗読劇　元・原発技師のモノローグ〈独白〉

線量計が鳴る

脚本・主演　中村敦夫

故郷を思い　ひとり語る

この朗読劇は俳優で作家の中村敦夫さんが書き下ろしたオリジナル作品です。

小・中、そして高校の途中までいわき市で過ごした中村さんにとって、東日本大震災と原発事故は大きな衝撃でした。津波で破壊された海岸線の前で終戦後の焼け野原を思い起こし、放射能に汚染された故郷に言葉を失いました。

こうしてしまったのは誰なのか。だれが責任をとるのか・・・。中村さんは深く自問します。

この劇では、原発立地町である双葉町出身の老人を語り部にして、原発事故のあと、何が起こったのかを見つめ、その本質と背景を明らかにして行きます。しかも中村さん自身がふるさと訛りの老人を演じることで、静かでリアルな怒りが立ち上がってきます。

「原発立地自治体に住んでっから、再稼働しねえど飯が食えねえと言い張る人がいる。んだら聞くが、あんたさえ飯が食えれば、周囲の人間や子孫がどんな目に遭ってもいいのげ？他人に迷惑をかけず、まともな仕事で自分の飯ぐらいちゃんと食っていげよ。ほんでねいと、あんた、人間の屑になっちまうど」

まっすぐな言葉が、聞く人のこころに沁みていきます。

中村　敦夫

一九四〇年東京生まれ、小・中時代を福島県いわき市で過ごす。

東京外国語大学を中退して俳優の道へ進み、一九七二年主演した「木枯し紋次郎」が空前のブームに。ニュースキャスターや参議院議員なども努め、作家としても活躍している。主な著書に「チェンマイの首」・「簡素なる国」等

日本と原発　４年後

監督　河合弘之（弁護士）　構成・監修　海渡雄一（弁護士）　音楽　新垣隆

全国の原発差し止め訴訟の先頭に立つ弁護士が描く原子力発電のすべて！

2014年に発表された映画『日本と原発　私たちは原発で幸せですか?』から1年。
刻々と変化する問題を新たに伝えるために、映画「日本と原発」は、その瞬間を記録して続けてゆく。

ピラミッドのように積み上がりながら、ふる里を侵蝕し続ける放射性廃棄物。
毎時5.0マイクロシーベルト！放射線量標識が立ち並ぶ常磐自動車道。
低線量被曝とは？ 母親たちの苦悩に答えはあるのか？
日本にも起こりうるテロ・戦争行為で原発は、自国に向けられた核兵器と化す。
高浜原発を止めた司法の判断！ そして再稼働は…？
東電元役員に下された強制起訴までの道のりとは…？